二十数年来、一日もこの胸から離れることのない二郎のこと

乙飛九期　兼藤　二郎

母　兼藤スマヨ（広島）

暑中お見舞い申し上げます。大変暑い日が続きますが皆様が方にはご健勝にてお過ごしのことと存じます。突然不躾の便りを差し上げます。私は兼藤二郎の母でございます。今春以来度々のご親書を拝受しながら筆不精がたたって御返事もさし上げず申し訳ございません。

慰霊碑の写真をお送りいただいたり、また先日は立派な名簿を作っていただきまして、並々ならぬご配慮御苦労のほど深く感謝申し上げます。いついつまでもみな様のお心にかけて下さいますこと、亡き本人の喜びは勿論ですが、私達親兄弟にとりましては何よりの喜びであり、満足でございます事を、つたない筆のままお礼の言葉とさせていただきます。二十数年来、一日もこの胸から離れることのない二郎のこと、愚かな親心の恥ずかしさも忘れて世に在りし日の姿を思い出して懐かしく嬉しく心あたたまる思いでございます。

生存者の方々はわずか二十四名とのこと、まことに九死に一生の中から生還なさいました皆様が、どなたも立派な社会人として、世の戦闘に立ってご活躍くださいますことを承りますと、いつしか熱いものがこみ上げてくるのでございます。どうか、御身を大切に遊ばして、私の愚息の分まで長生きしてくださいますよう、遠い広島の地からお祈りさせていただきます。

乱筆乱文にて失礼いたしましたことをお許しくださいませ。

かしこ

（昭和四十二年十二月二十六日号掲載）